

『ヘンリー八世』におけるポリティックスと 顧問官の役割

石橋 敬太郎

Politics and the Role of the Counselor in *King Henry VIII*

Keitaro ISHIBASHI

Critics tend to compare the process that King James I used to establish his absolute sovereignty in England to the process that Henry VIII used to seize power in Shakespeare's play. During King James' reign, parliament opposed his attempt to extend his power. The play, however, makes no mention of these political struggles. Despite the critic's comparisons, the play's omission of the political struggles makes it difficult to assume that the monarchy of James and that of Henry VIII are comparable.

Paying attention to the politics in 1613, when the play was performed for the first time, will make it clear that the choice of counselor was an important political problem in those days. Admittedly, things were getting serious, when the earl of Salisbury, who successfully conducted the policies of James, lost his position in 1610.

The King erred in his choice of counselor to succeed the earl. He appointed Henry Howard and his family, who were ambitious and had no regard for politics, to the counsel post. As a result of this, England faced a serious crisis. This crisis led directly to the confrontations between parliament and King James. Then a humanist insisted that the King should choose a good counselor who could give adequate advice to him.

In the play, although queen Catharine gave adequate advice to Henry VIII, the king believes the flattery of Wolsey, as James fell for that of the Howard family. That caused the country to be confused. The people suffered from heavy taxes, which Wolsey imposed on them. Finally, Henry VIII appointed Cranmer as counselor. Cranmer was known for his honesty. His counsel led to the recovery of England.

The present paper examines the role of the counselor, focusing on the political movement from 1610 to 1613 when the Howard family began to assume the reigns of government. It may be given as a conclusion that the play shows that Henry VIII realized that he should choose a man of honesty as his counselor in order to stabilize his kingdom.

序

従来、シェイクスピアの『ヘンリー八世』論は、絶対主義的な主権を確立するに至るまでのジェームズ一世 (King James I) の過程を、ヘンリー八世が権力を自らの手に集中させる手腕にたどる傾向があった¹。しかし、ジェームズ即位後の議会は、国王大権の拡大を抑制しようとしており、ジェームズのもくろみは、たびたび中断させられることとなった²。従って、劇中で両者の論争

が触れられていない限り、このような政治的対立を無視してヘンリーの権力を論じることは、多少無理があるように思われる。

むしろ、初演されたとされる1613年当時の政治的状況と重ね合わせてみると、この劇は、重要な政治上の問題であった顧問官の選択を主題としていることが見えてくる。すなわち、1610年、国家安定のために尽力してきたソールズベリー伯 (Earl of Salisbury) を失脚させたことを契機に、ジェームズは顧問官の選択を誤り、政治的

な危機に直面することになるのである。

折しも、1612年のソールズベリー伯の死後、宮廷内の勢力地図を塗り変えようとする廷臣の動きが活発になってきた³。その中心となったのは、カトリックのノーサンプトン伯ヘンリー・ハワード(Henry Howard, Earl of Northampton)⁴とその一族にあたる廷臣であった。ハワード派は、これまでの議会を中心とした政治に反対したばかりか、政治の中心を宮廷に移しかえたことが功を奏して、国王大権の拡大をもくろむジェイムズの寵愛を得て、後に彼の顧問官となる。

一方、この時代のイングランドは、国家の財政基盤を安定させるための課税問題の解決や、海上貿易およびスペイン政策を含む外交政策の解決を余儀なくされていたのだが、ハワード派は、宮廷内で権力を掌握することのみ腐心し、国家存亡の危機を引き起こすことになったのである⁵。政治的な手腕において決して有能だとは言えないジェイムズを支えてきたのは、ソールズベリー伯であったことを考えれば、王に適切な助言を与えられる人物を顧問官として選択することが、いかに重要であったかは想像に難くない。

劇中でも同じことが示される。王妃キャサリンは、王の顧問官ではないにしても、王の政策に適切な助言を与えるが、王は野心的なウルジーの甘言を信用する。そのため、政治に対する臣民の不満はさらに大きくなる。最終的に、王が「正直」(honest)と「誠実」(true-hearted)を徳とするクランマーを顧問官としたことにより、イングランドは安定することになる。

とは言え、劇中のヘンリーの政治体制とジェイムズのそれとを重ね合わせて、議論を展開することは危険なことかも知れない。しかし、そうしたトピカルな読みを促す要素が劇中に散在していることは事実であり、この側面からこの劇を捉え直せば、これまで見えてこなかった顧問官の問題が明らかになると考えられるのである。

以下においては、『ヘンリー八世』を初演された時代の政治の流れ、とりわけ、ハワード派が政治の実権を掌握し始めた1610年頃から1613年に至るまでの政治の流れの中に位置づけて、顧問官が果たすべき役割について考察してみたい。その結果、『ヘンリー八世』は、国家を安定させる上で「正直」かつ「誠実」な顧問官を選択すべきことをヘンリーが認識するまでの過程を表した劇であることを明らかにしてみたい。

I

最初の二幕では、王の顧問官ウルジーの政治について示される。彼は、枢密院に諮ることなく、独断でフランスと協定を結び、失敗したことがバッキンガムによって

述べられる。また、ウルジーの命令により、市民は重税を課せられ、蜂起を起こす寸前であることも明らかにされる。ヘンリーの政治システムでは、外交政策や課税といった重要な問題は一人の顧問官の判断に任せられており、ある意味で、ジェイムズの政治体制を映し出しているとも言える。

ジェイムズは、1610年3月の議会で自らを神の代理人であると宣言し、イングランド国家の父として、国家の問題について議会に干渉されることを望まなかった。代わりに、宮廷内での権力拡大をもくろむハワード派のはたらきかけにより、王は、議会ではなく、宮廷を中心とした政治を行うことを決意する⁶。そして、1612年5月のソールズベリー伯の死後、王はハワード派を国家の要職に就け、逆に彼らの意のままに政治を操られることになる⁷。

それどころか、ジェイムズは、国家の政策には無関心であり、政治をハワード派に委ね、毎日を貴族的な余暇に費やしていたのである⁸。王の政治的な無関心ぶりは、劇中でも映し出される。ヘンリーは、王妃キャサリンから課税とその結果を知らされてこう言う。

Things done well

And with a care exempt themselves from fear;
Things done without example, in their issue
Are to be fear'd. Have you a precedent
Of this commission? I believe, not any.
We must not rend our subjects from our laws
And stick them in our will.

(I. ii. 88-94)⁹

一見、ヘンリーの言葉は、先例や法を重視した言葉のように思われるが、ここで重要なことは、彼が市民に対する課税とその結果について全く知らなかったことである。しかも、バッキンガムを除く周りの宮廷人も、時の権力者であるウルジーに政治を一任し、その政治に異論を唱えることはない。この点についても、ジェイムズ時代の宮廷人と同じであった。それ故、政治に無関心な国王を頂いている国家にあって、国王に適切な助言を与えられる顧問官がいかに重要であるかを、シェイクスピアは劇中で示したかったのではあるまいか。

事実、有能な顧問官を失ったジェイムズは、全くの政治的無能力ぶりを発揮し、国家を窮地に陥れる¹⁰。その意味からすれば、国王に適切な助言を与えられる助言者としてのキャサリンの登場は、この劇が初演された当時の王の顧問官をめぐる問題を喚起するドラマトゥルギーだと言えるのである。この劇の資料の一つとされている

ホリンシェットの『年代記』に、助言者としてのキャサリンについて言及されていないことは、そのことの証左にはかならない¹¹。

II

キャサリンは、課税問題に適切な助言を与えるのみならず、バックinghamを陥れようとするウルジーの計略をささげろうとする。バックinghamは、ウルジーの悪政に反論できる唯一の廷臣であった。その彼を反逆者として非難するウルジーに、彼女は「慈悲ある言葉を述べなさい」（一幕二場143行）と忠告する。彼女の忠告は、王を過ちから救おうとする顧問官の姿を表していると言っても過言ではない。

それにもかかわらず、ヘンリーは彼女の忠告を聞き入れず、悪意に満ちたウルジーの甘言を信用する。その結果、バックinghamは、政治の世界から閉め出されたばかりではなく、その地位をも奪われ、ウルジーによる暴政がイングランドに蔓延することになる。もちろん、統治にかかわる全責任は王が負っており、どちらの助言を選択するかは王の判断に任されているというジェイムズの政治理念をコンテキストとすれば¹²、劇中のヘンリーは、ウルジーの助言の真意を認識できない限り、国家の安定は望めない。

それ故、ノーフォークは「王は、ある日、ウルジーのことがわかる」（二幕二場21行）ことを期待し、「そうなることを神にお願いする」（同22行）とサフォークは答えるのである。彼らの言葉は、国王に適切な助言を与えられる顧問官が国家の安定にとっていかに重要であるかを言い表している。実際、この時代のヒューマニストたちは、政治上の問題に適切な助言を与えられる人物の育成を教育目標の一つに掲げ、事態の改善を急いでいた¹³。

ところが、劇中ではウルジーに対抗できる有能な顧問官は現れない。ウルジーの絶大な権力は、彼が主宰する華やかな仮面舞踏会に象徴されるものの、彼を支持する宮廷人の悪臭ばかりが鼻につく。その舞踏会の最中でのサンズの言葉は、有能な顧問官不在の宮廷政治が招いた腐敗を端的に言い表している。

The devil fiddle' em, I am glad they are going,
For sure there's no converting of' em : now
An honest country lord as I am, beaten
A long time out of play, may bring his plain-song,
And have an hour of hearing, and by'r lady
Held current music too.

(I. iii. 42-47)

そればかりではなく、舞踏会の終わりに変装したヘンリーが登場し、その変装を見破るというウルジーの下車たへつらいに歓喜する彼の姿は、ヘンリーが求める顧問官の姿を如実に物語っている。事実、ジェイムズは、顧問官に追従的なへつらいを強要し、自らの意にかなう顧問官を選び続けていたのではなかったか¹⁴。その意味からすれば、1613年6月の『ヘンリー八世』上演は、顧問官の選択の重要性を示す上で絶好のタイミングだった訳である。そして、この問題は、ヘンリーが王妃キャサリンとの離婚を望んだことで、さらに表面化することになる。

キャサリンとの離婚に際し、ヘンリーは、法に則りこの問題が解決されることを望んで、その裁決に従うと言っておきながら、キャサリンとの離婚を支持するクランマーの帰国を待つ。その理由として、彼は「この枢機卿どもが、私を弄んでいることがわかる。ローマの遅々としたものぐさやわなは、ぞっとするほど嫌だ」（二幕四場233-35行）と答えるのである。

III

ところが、ウルジーとローマからの使者キャンピアースの「遅々とした」裁判手続きは、全く合法的なものであり、キャサリンは、離婚を求められる理由がわからないと言う。もちろん、その理由は、歴史と同じように、ヘンリーが男子相続者を望んでいたことによる。歴史では、離婚に至る神学的、法的手続きが詳細に述べられているのだが¹⁵、劇中ではこの点に触れることはない。

代わりに、顧問官の問題を掘り下げていくのである。すなわち、ヘンリーは、教皇の裁定に従うという先の誓いを無視して、クランマーの意見に従ってキャサリンとの離婚に踏み切る。そのことは、彼が自らの意にかなう顧問官を選び続けていることをよく表している。このような政治システム内では、王の意思を正しく導ける顧問官の選択がいかに重要であるかが示されていると言ってもいい。

劇中と同様に、この劇が初演された時代の顧問官は、罰を受けるとか、寵愛を失うことを恐れて、王が聞きたいことを話す傾向はあった。その意味では、劇中で政治的野心とそれともなう悪が露見され、失脚したウルジーが部下のクロムウェルに話す言葉は示唆的である。ウルジーは、すべてを国家や神、真実のために捧げる顧問官の勤めを語るのである。

Cromwell, I charge thee, fling away ambition,
By that sin fell the angels; how can man then,
The image of his maker, hope to win by it?

Love thyself last, cherish those hearts that hate thee;
Corruption wins not more than honesty.
Still in thy right hand carry gentle peace
To silence envious tongues. Be just, and fear not;
Let all the ends thou aim'st at be thy country's,
Thy God's and truth's:

(III. ii. 440-48)

政治的昇任を望む廷臣と、国王大権の拡大をもくろむジェームズの野望が政治の中心を占め、その結果、内外の政治が等閑視されつつあった時代、失脚したとは言え、劇中のウルジーの言葉は、顧問官のあるべき姿を言い表しているとは言えまいか。ジェームズの廷臣の一人であったベイコン(Sir Francis Bacon)は「王は、国家の悪習を教え、ためになる方向を示唆してくれる、誠実な顧問官をもたなければならない」¹⁶と繰り返し王に述べていたが、彼の言葉は先のウルジーの忠告と一致する。

劇中では、新たに王の顧問官となった克蘭マーは「立派な人物だ」(三幕二場72行)とノーフォークに評される。その克蘭マーは、王とキャサリンとの離婚に尽力し、宮廷内のカトリックを向こうに回し、イングランドの宗教改革とローマからの独立の立て役者となる。1610年7月の枢密院会議で、リチャード・バンクロフト(Richard Bancroft)がハワード家のカトリック信奉を問題とし、1612年、ジョージ・アボット(George Abbot)がさらにこの問題を取り上げたことをコンテキストとすれば¹⁷、彼の登場は、政治的な危険に直面したときの顧問官の役割を適切に表していると言ってもいい。

問題は、そのためにキャサリンを犠牲にしたことである。歴史でもこの点に触れられており、離婚問題についての意見を求めにオックスフォードへ赴いた王の使者は、町中の女性から肩を浴びせかけられたことが記されている¹⁸。しかも、王妃に同情を寄せる高位聖職者もかなりいた¹⁹。劇中では、このことには触れられず、逆にキャサリンは、誰からも助けられることもなく、ウルジーたちに追いつめられることになる。そのことは、いかに正しい助言であろうとも、それが正しいかどうかを判断するのは王であるというジェームズの政治理念を明白に表しているとともに、その理念の背後に潜む危険性をも明らかにするのである。

IV

歴史と同様に、劇中でもヘンリーは、プロテスタントのアン・ブリンと再婚したことにより、カトリックのガードナーをはじめとする枢密院議員の不満を招くことになる。彼は「お妃の両腕と言うべき克蘭マーとクロムウェ

ル、それにお妃が墓場に眠ってくれないうちは、決して事態はよくなるまいだろう」(五幕一場29-32行)と言っ

てはばからない。そのガードナーの陰謀に対して、克蘭マーは「正直」と「誠実」を武器に対抗しようとする。それを見たヘンリーは、まず、そうした彼の美徳が常に正当な裁決を得ることはないと言え、克蘭マーのナイーブな考えを次のように非難する。

. . . and not ever

The justice and the truth o'th'question carries
The due o'th'verdict with it : at what ease
Might corrupt minds procure knaves as corrupt
To swear against you? such things have been done.

(V. i. 129-33)

だが、そうした宮廷を作り出したのは、追従的な顧問官を選び続けたヘンリーの責任だったはずである。さらに、歴史上のヘンリーは、両者に目配りをきかせながら、宗教改革を押し進めて行くことになるのだが、劇中のヘンリーは、廷臣のサフォーク公とトランプ遊びに興じている。また、宗教改革にともなう国王の教会上の主権をめぐる問題についても触れられることはない²⁰。

このように、劇中でヘンリー統治の時代、重要な問題であった宗教と政治に関する問題が極力排除されたことは、顧問官の問題を提示するドラマトルギーとなっていると言える。その証拠に、当初、克蘭マーを自らの意にかなう顧問官として選んだのだが、最終的に王は「正直」と「誠実」を徳とする彼の姿に、顧問官の真の資質を見出すのである。

Look, the good man weeps:

He's honest on mine honour. God's blest mother,
I swear he is true-hearted, and a soul
None better in my kingdom.

(V. i. 152-55)

この時代のヒューマニストたちは、「正直」かつ「誠実」な人物を顧問官とするように繰り返し述べていた。その点を考慮に入れると、王がガードナーたちの計略を妨げたことは、ようやく、彼が克蘭マーに顧問官の理想的な姿を認識したことを伝えているのである。

結局、ガードナーたちと克蘭マーが手を結ぶことで、キャサリンとの離婚とアン・ブリンとの再婚にかかわる宗教的対立は終わる。そこには、それに至るまでの神学的論争も、法的手続きにまつわる論争も見あたらない。ましてや、教皇の破門宣告から、王が宗教上の主権を確立するまでの政治的手段にも言及されない²¹。言及され

るのは、彼らが仲直りすることによって王権が増すということだけなのである。

実際、過去において、エリザベス女王は、有能な人物を顧問官とし、次第に自らの権力を中心化していった。もっとも、女王統治の終わりには、その政策は崩壊を迎えることになる。しかし、ジェームズの政治に絶望し、女王の政治にノスタルジアを感じていた廷臣たちの間で、有能な顧問官を中心とした政治を待ち望んでいたことは想像に難くない。劇中でエリザベス統治に輝かしい未来を予言するクランマーの言葉は、そのことを能弁に物語っている。従って、『ヘンリー八世』は、ジェームズ時代の政治を映し出ししながら、国家を安定させる上で「正直」かつ「誠実」な顧問官を選択すべきことを、ヘンリーが認識するまでの過程を表した劇だと言えるのである。

注

- 1) Donna B. Hamilton, *Shakespeare and the Politics of Protestant England* (New York: Harvester Wheatsheaf, 1992), p. 164. 本書の中で、ハミルトンはこの点に触れている。もちろん、『ヘンリー八世』は、ジェームズ時代のポリティックスを映し出しているのではなく、ヘンリー八世統治の歴史的意義を探究した劇だとする見解もある。Cf. Wolfgang G. Müller, "Shakespeare's Last Image of Royalty: 'Henry VIII'" in *Henry VIII in History, Historiography and Literature*, ed. by Uwe Baumann (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1992), pp. 223-39.
- 2) Albert H. Tricomi, *Anticourt Drama in England 1603-1642* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), pp. 55-57.
- 3) Hamilton, p. 166.
- 4) ノーサンプトン伯は、1580年代にスペイン人に雇われており、1604年のスペインとの和平協定において重要な役割を果たした。しかも、大陸で宗教戦争が表面化しつつあった時代、彼はカトリックに信教の自由を望む人々と密接にかかわっていた。
- 5) Godfrey Davies, *The Early Stuarts 1603-1660* (Oxford: Clarendon Press, 1987) p. 16.
- 6) Davies, p. 16.
- 7) Davies, p. 16.
- 8) Tricomi, pp. 10-11.
- 9) 拙訳を含めて、本文からの引用の行数はアーデン・シェイクスピア版による。テキストとしては *King Henry VIII*, ed. by R. A. Foakes (London and New York: Methuen, 1984) を使用した。
- 10) Davies (pp.13-16およびp. 58)によれば、ソールズベリー伯の死後、ジェームズは、財務府長官と秘書官を兼務し、イングランドの財政を悪化させる原因となった。財務府は、宮廷費用の増大から着実にその負債を増加させ、その代償として課税レートの引き上げをまくろんだ。さらに、失敗に終わったものの、対スペイン政策の緊張が高まる最中、ジェームズは、ハワード派の意見を支持して、チャールズ王子とスペイン王女との結婚を認める。この結婚の条件として、王女に信教の自由を認めることになっていたため、彼らの結婚が成立した場合、イングランドはカトリック国に隷属する危険にさらされることになった。
- 11) Raphael Holinshed, *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland* (New York: AMS Press, 1965, rpt. 1976), vol.3, pp. 544-778.
- 12) James I, *The Works* (Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1971), pp. 167-69.
- 13) John D. Cox, *Shakespeare and the Dramaturgy of Power* (Princeton: Princeton University Press, 1989), p. 42.
- 14) Davies, pp. 1-2.
- 15) ヘンリー七世の死により、ヘンリー八世は、彼の兄の妻キャサリンと結婚する際、教皇からそれを許可する特免状を得ていた。そのため、キャサリンと離婚するには、さらに教皇から特免状を得なければならず、ヘンリーは、先の結婚が有効かどうか、この問題の根拠をなす『レビ記』「18章16節」と「20章21節」、および『申命記』「25章5節」の解釈をめぐり、教会法学者に意見を求めた。その議論の中で、離婚は認められないとする意見が多くを占めるとともに、教皇も同じ見解を示した。その結果、ヘンリーは、教皇を無視して離婚を認める権限がイングランドの聖職者に与えられるかどうか、法律家に解決を委ねることになる。Cf. Richard Rex, *Henry VIII and the English Reformation* (Hong Kong: The Macmillan Press Ltd, 1993), pp. 8-13.
- 16) G. P. V. Akrigg, *Jacobean Pageant; or, The Court of King James I* (New York: Atheneum, 1967), p. 245.
- 17) Hamilton, p. 175.
- 18) Rex, p. 18.
- 19) Rex, p. 18.
- 20) Rex, pp. 19-29. 周知のように、当時のイングランドには、国王が教会の首長であるとする見解はなかった。この理念とは逆に、ヘンリーとクロムウェルは、

1533年にAct against Appeals、1536年にAct against the Authority of Romeを制定法として定め、教皇の権威に関する法的な根拠を一掃した。

- 21) Rex, pp. 29-37. 国王の教会上の主権という理念をイングランドに浸透させるために、ヘンリーは、神学者や聖職者による説教を通して、臣下にこの理念への服従を強制した。この政策に応じない聖職者は、権利剥奪という罰を受けることになった。